

小学校におけるベースボール型ゲームの教材構成の工夫に関する実践的検討

ー投げられたボールをバットで打つ感覚づくりに着目してー

内山 聖也 （ 信州大学 ）

1. 目的

ベースボール型ゲームは、ヒットから攻防が展開される。進塁や得点、戦術といったゲームの面白さを感じるには「打つ」ことが不可欠である。

現在、Tスタンドを使い静止したボールを打つ実践が多く、投げられたボールを打つ機会は少ないようである。後々の発展的な学習をスムーズに行うためには、投げられたボールを打つ機会を増やすことが大切と考えられる。

そこで本研究では、「投げられたボールをバットで打つ」ための感覚づくりに着目し、ベースボール型ゲームの教材構成を考案・実践することを通して、その有効性を検討することを目的とする。

2. 研究方法

対象者：長野市内Y小学校5年生（26名）

研究方法：①文献及び先行研究から、小学校体育におけるベースボール型（Tボール、ソフトボール）の簡易化されたゲームを取り上げ、学習指導上の課題を明らかにする。②課題を踏まえ、投げられたボールを打つことになじませ、バットで打つための感覚（コツやカン）の習得ができる教材を運動学的な視点から考案し、単元構成する。③促発指導に基づく授業実践を行い、印象分析と学習カード（形成的授業評価）から教材と単元構成の有効性を検討する。

3. 結果と考察

文献及び先行研究の検討から、「投げられたボールをバットで打つ」教材や学習機会が少ないことが明らかとなった。そのため、子どもには投げられたボールに対する先読み能力（カン）が育っていないことが推察された。

そうした課題を踏まえて、投げられたボールに対する先読み能力を芽生えさせる視点から、「手キャッチ」「手打ち」を考案した。加えて、Tスタンドでは打てる児童が、向かってくるボールに用具を出すコツを習得するため、テニスラケットを使用する「ラケットバント」「ラケットバッティング」、軽量のバットを使用する「バント」「バッティング」を考案した。

これらの練習課題とメインゲーム、本実践前に行われたTスタンドで打つ授業3時間を合わせた、合計8時間を単元構成し、授業実践を行った。

授業実践の観察（印象分析）から、単元序盤に行った「手キャッチ」では、初めは手に当てるだけや、両手でキャッチしようとする姿が目立ったが、練習を通し、片手でキャッチできる姿が確認されるようになった。これは、投げられたボールに対する先読み能力が育った成果と考えられる。

単元中盤の「ラケットバッティング」では、初めはボールを投げる人と打つ人のタイミングが合わない姿が見られた。そこで打つ人は「準備・引いて・打つ」のリズムでラケットを振り、投げる人もそれに合わせて投げるようにした。それにより、タイミングよく打つ姿や、より力強く打つ姿が確認されるようになった。また、メインゲーム中に守備がない所を狙って打つ姿も確認された。これは、お互いのタイミングを合わせる意識を持つことができたり、向かってくるボールに用具を出すコツを習得できた成果と考えられる。

単元終盤の「バットを使ったバッティング」では、打つ準備の「タメ」を作れたり、打つ瞬間に向けて力強く振り出す姿が見られ、バッティングの準備局面での上達が確認された。メインゲームでは、バットかラケットを自分で選び、バッティングを行った。当初バットで打つのが苦手だった児童も、2～3球の打撃機会ですべて打てるようになり、形成位相のまぐれ層に入ったことが確認された。

形成的授業評価の結果から、評価が減少した授業実践回があったが、ほぼすべての項目で高い数値が見られ、教材に対する一定の評価が得られたことが確認された。学習カードからも、「動くボールに当てる感覚がつかめてよかった」「バットで打つと失敗もあるけど楽しい」という記述が見られ、楽しく学習に取り組み、「投げられたボールをバットで打つ」感覚を習得できたことが明らかとなった。加えて、「ホームランを打ちたい」「もっと強く投げられたボールを打ってみたい」という感想から、本実践がベースボール型の運動への関心・意欲の向上に繋がったことも確認された。

4. 結論

本研究で考案・実践した教材構成は、対象者への印象分析や学習カード（形成的授業評価）からベースボール型ゲームの学習に関する有効性が確認された。今後の課題は、狙った所に打ち返せる技能の習熟のための教材の検討である。